

中将姫一代記



^ 13
8294
4



門 へ 13
流 3294
卷 4

中將姫一代記卷之四

中將姫御麻ちりく打撃事

大正十年八月廿九日
本大學出版部
贈

中將姫去奉の及有海ら由つるせのみより海は急りまきまらく彌
鑽淨と種を言寫し取八通夜彌名念佛して安喜の妙果を欣
求しむりいふる往昔の宿縁也やけちりゆめのみよりい東あつるこ
尼公因りてかりむい互にお助く修習念佛懈怠をくけよた公孫
陀梨刀の石可思議なること依彌鑽一五歳三徒の女人心想羸劣の佛
法施書の我をけ佛り慈也哀愍み救ををえんば何どの時ふり汝女婆
のふ道とをえんや傳佛恩の深く大なる事をぞく須弥滄海も
命とくするよ思ふに必忘りのよきを常々姫君を進めりて

ありむらん從^レ御方常母書寫^一のこゝ一經一卷なまきくハ是を
形を^レとて常^レ耕^レ曲^レのむ地^ととてせあ^とありき^レハ法如は^レ紺紙
今^レ此の淨土經を^レ居^レら母持^レの^レ尼公よろこ^レひ起^レあ^ととらんま
母^レ乃^レの^レ成^レむ^レ法如^レ驚^レき^レ歎^レき^レ居^レ室^のお^レあ^とよ^レ月^のの
ア^レ一^レ彼^のは^レめ^をな^をか^を終^るは^レ末^乃知^とさ^とハ^レ詮^るを
居^室の^をを^レ同^レ札^めり^く經^を傳^えん^とむ^レ料紙箱^るよ^よ
元^公に^残一^むい^し手^乃は^{あり}

各^國ハ^{天津}を^井の^をあ^れば^いは^はの^國ハ^お母^時を^舞
法如^尼は^一首^の和^哥と^復あ^らま^まの^形見^とも^あい^經を^よ
愚^一も^とり^續經^念佛^とせ^しめ^し眠^んと^しゆ^す夏^の經^衣

行^かく^めあ^かと^ハ鹽^嗽く^おの^勤を^とて^唯も^家の^礼衆^と
と^く備^賞を^あり^拜し^ゆ中^又全^堂を^衆に^弘勸^れる^後と
礼^一あ^よと^服衣^尼公^母形^見と^て衆^をせ^し紺^紙の^御經^彌
勸^意を^レ此^の中^のの^りを^とご^の事^なら^とち^傍よ^らん^と
も^よま^まと^法如^尼自^承よ^後と^かく^備ハ^弘勸^喜薩
吾^を憐^れん^尼と^のを^現し^て晨^昏法^の道^と教^へ
道^すと^むい^らと^と有^く一^希と^禮拜^を重^しむ^いら^り儀^と
よ^の弘^勸喜^薩ハ^慈恩^六天^の中^亦四^の兜^率天^母を^とえ
よ^張と^し一^和哥^に各^國ハ^{天津}を^井の^をと^ある^ハ境^卒天^の
事^なら^五ツ^の國^とと^ハ女^人ハ^障の^迷國^とと^もた^とい^境卒^よ

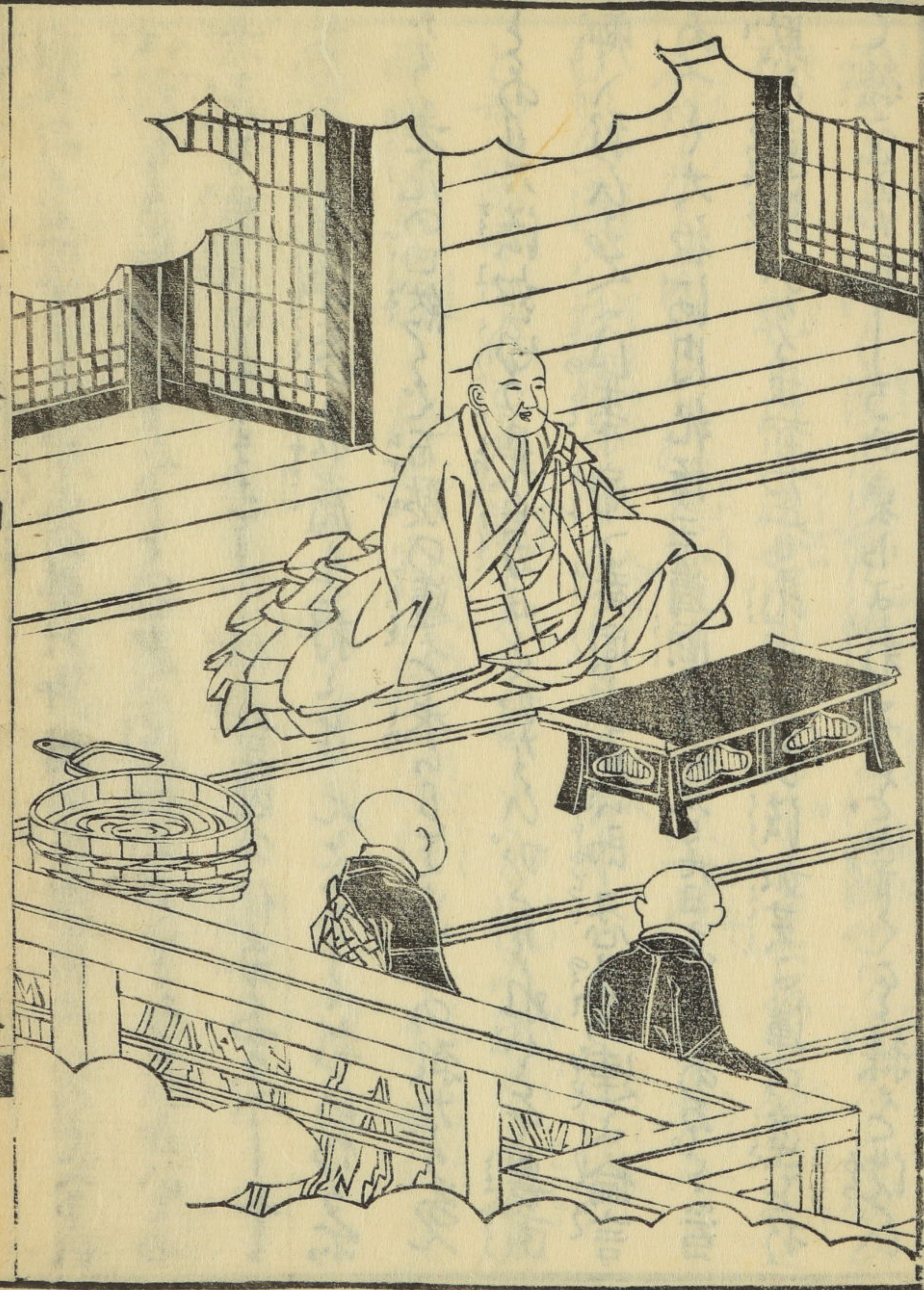
生身くも尚三界の中なるも六三障之徒の園をくも一唯
阿彌陀佛四十八願の中持女成男此のくもくも今此の
西方の住まふこと六三障の冥を園速く晴く三のを破る
明らかなる證よのわらふあふ三ツの園ハ西よもも今んと保くま
よとは如孫信願して今佛も持よはともあやとかり

法苑阿彌陀觀音の二聖よ曼陀羅を感

得一む事本

初も法苑尼去年二月はちよなりくともあふのあふあふ
此の家のを縁をのうと今ハ蘭若の形よ又何そ徒らよ光
陰とあふんや彩くハ祿瀆淨と經一千巻と書寫せんと大願

と起一日は二巻代寫して色りむら今午六月はあも其功
終りく佐養をかり一千巻の經を百卷を合して經をも納め
ふ一同十六日より本堂の入りり吾數年の願を成就とことと
ども復一ツの大おあり平生所修の念佛三昧の功よつと現
ぞあむく生身の彌陀如来を招きよと若持よとんハ再ハ
は本堂代かど飯食して死とべと本堂の南の局よまき
終日通夜念佛誦經一あも終るよ十七日の日中は老尼ハ
忽ちとて来りりよ法苑尼何とのあよりあむよと同のあ
あハ遙よ西の方よりありくが彼よ若をく尼公の修けく
ましくて信心の深さを感しよもとり吾極樂淨土を



中乃姫當麻ち
 小く刺髪一
 乃小圖



寝おれを写し〜く〜の佛北御國の安樂居士の天上天下に
 比れなきと相せり〜との事法如をよまうごいむいこの
 老尼も亦くよま〜佛菩薩の化方か〜
 恭敬一吾浄土の莊嚴を相ともんとく〜
 なる老尼の曰然〜百駟の蓮を求め〜
 との曰法如ゆり是自力めくか〜
 卿の彩ひ〜は奉帝へ奏聞〜即恐海の蓮は倫言
 あつ〜大和の内紀係三箇回より十九日九日ありのあり〜
 駟の蓮個ひ〜は一日た二日老尼乃び法如其蓮の盡と
 て絲をとりあ〜ちの東水も彩ひ井を穿く〜を絲を洗ひ

深るよ水ハ清く澄々且度絲を又〜に深成せり傍り後
 擲めけ〜乾と故に後せけ井を深井と云其極と絲極極と
 名付〜同ハ三月廿黄昏に止又殿斗れ女性一人来て老尼
 じのひ違乃絲調と云と知らる老尼〜ハ絲調ゆる
 と女性の曰よ〜こよひ織〜と〜機乃道と中堂の
 西水乃角ヲ擲〜縮裳三把に油を灌燭〜と是と織乃
 機乃勢軌〜然〜て子丑寅三時れ間に方九又其るに
 一丈又其曼陀羅を織終り曉に〜と織女を〜何
 なる〜一〜一丈五又其るに節〜切調軸
 と遂て巻〜西尼母〜其身を忽消其柝洪曼荼羅

と申ハ極樂淨土莊嚴の神と織願して心とたうと死を此
より伏僕ニ更け阿闍梨成陀せし元人の正命ありて佛菩薩
薩乃方便神力此所作ありしあり去程に老尼公是
を本堂に正面にかけ拜禮と申曼荼羅の中外造淨土
莊嚴第一指圖とて法如に教示する相傳終く偈と唱曰

往昔迦葉說法處佛事新起又有故
感君懇志我來此一至此場永離苦

明くて老尼法如申向く曰既申すも君が願ふと満ちて音も
今以歸申するとも一法如教にまかりて新や潔力あるなる
御方申くまこととて先に歸ぬ織女を誰人申く清くせぬとて

形を示しぬとてとてとてハ老尼座敷中て我ハ是西方極樂の
教主阿彌陀如来なり汝が志此形に成満るる今之に來觀せり
先に歸し織女と家服士親音なりとてひく善哉勉や吾今十三
年に過すく必汝成道く再會と誓いと座敷立玉と四方に
花飾り音楽空に満く光明と照し紫雲に赤くして西乃空に
入りて法如の河に成伏揚し隨喜に淨土あり渴作の思ひ
胸中しくくまこととて彌精進堅固なる

三人乃良女法如禪尼此弟子とてかりし

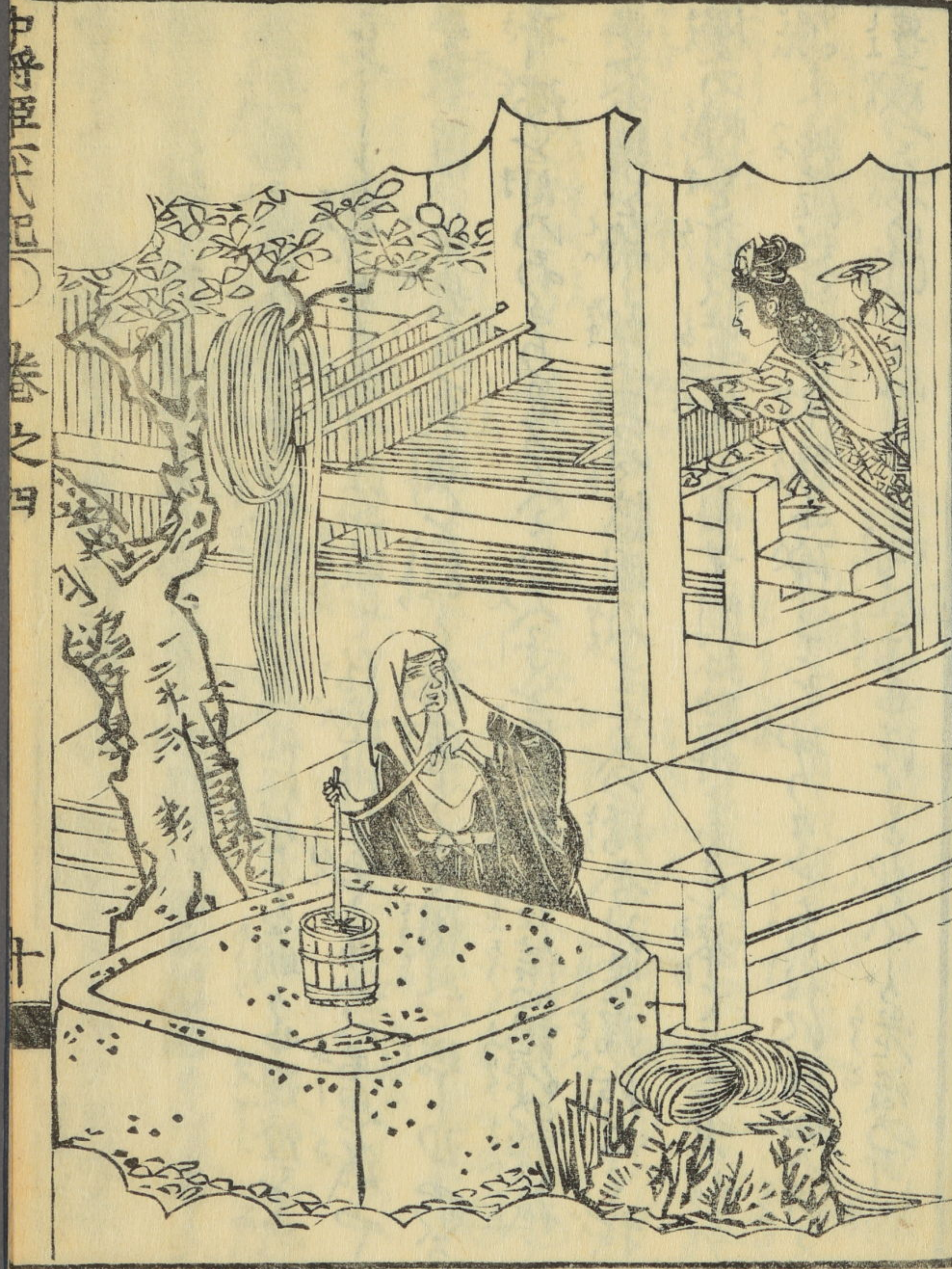
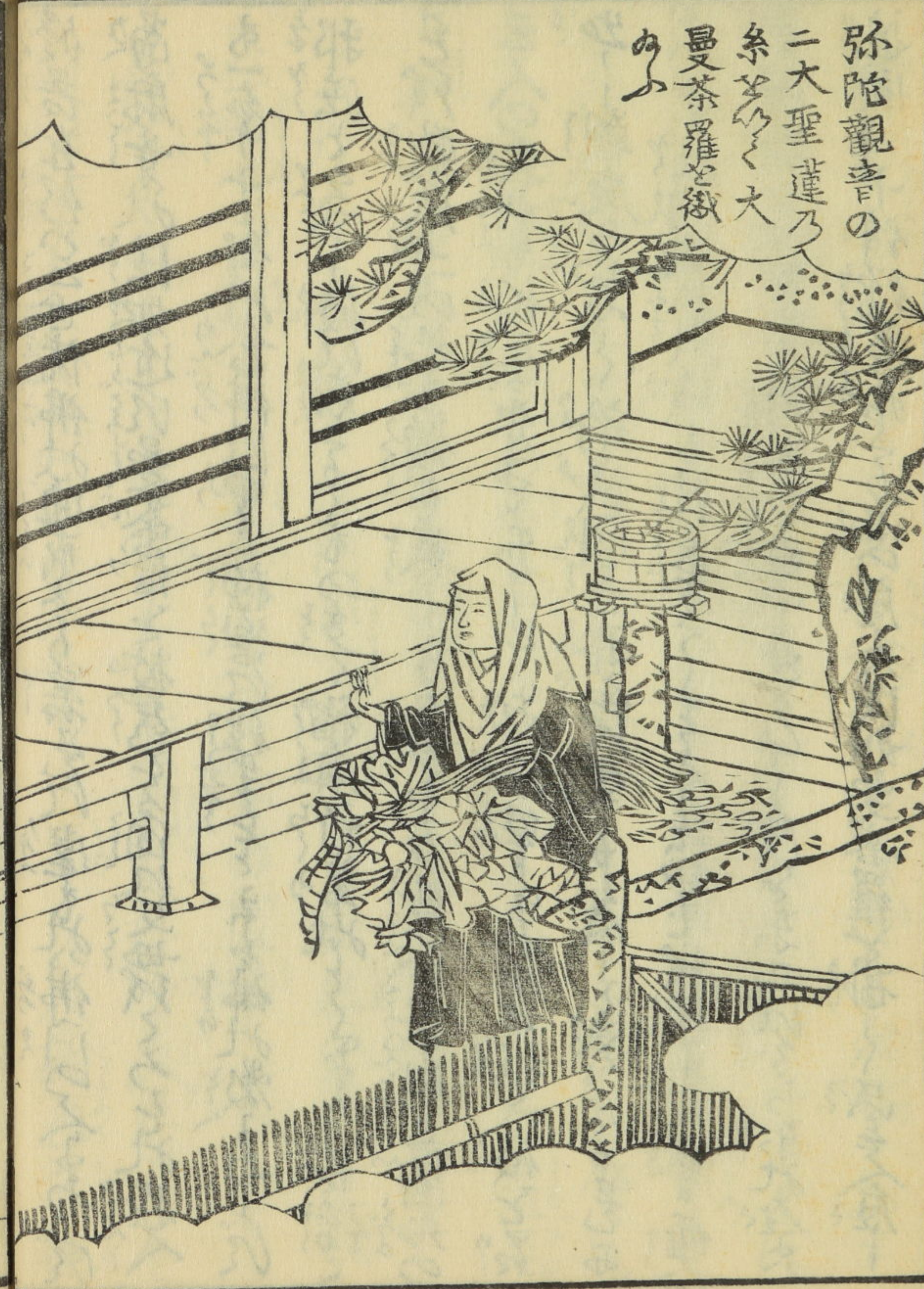
はる程法如比丘尼を老尼の相傳申すく曼荼羅の縁起と悉
晴淨土安分の趣と受得し心ひく畫夜毎りて念佛

玉女の如く御も吾朝中も經論傳りてとも極樂淨土に社
 嚴八耳に可なりたりし法如危の願にうく弥陀觀音此大
 聖來現し玉ひ安樂國に社嚴と云曼荼羅に形し玉とて
 今日此九丈のくまをくれば性生れ道中入るるは曼荼羅乃功力之
 ぞく遠逝の國を可はく之をゆく歩とてと貴賤樹廣門を
 市成か七聖之内よりも更く悉皆と玉ひなる中にも吳美芝柳十六夜
 とく主上は近く法如の妻女之を悉皆と玉ひ此曼荼羅と并深信心と
 催し玉ひこれ法如三人の宮女は玉ひの死を懇に曼荼羅の由縁と
 演別る女人の身は又障二從とく深罪あるに諸佛共慈悲形也
 陰とてくくり弥陀の願かと願ふは六百千恒沙劫にも女人の往生する
 りのみ有り有爲無常此世より進むる免南後世此一た可成念と念佛
 やとせぬと教玉と三人は玉女も過世の海にひせし下向くまらるが
 三人の女性宿因深く肉に著る也法如此其の幼化の途に深志
 せとて若くは世のまゝも貴も穢も後世に玉ひかひあはは後羅錦
 繡成身深くも度終身消せん爲の命永世の身此並亦とて玉ひあれ
 去来や尚麻寺にゆく後世は社嚴と三人思ひと玉ひて密り
 御所深志を彼寺にありし法如危と願くは玉女も考し供信
 危意蓮尼正見危と名を改不勤念佛を勤らむとて法
 禁裏に於く法如接圓問答の本
 其頃和別長谷寺此遠に接圓法師とて名利の傍あり玉ひ玉ひ品

を讀尚朱此六利... 親世音... 世の... 壽福... 曼荼羅... 消滅... 隆... 云... 可... 同門...

修善... 南... 也... 三人... 如... 法... 對... 攝...

弥陀観音の
二大聖蓮乃
糸まひく大
曼荼羅を織
ぬ



即又更より接園とて先十傳傳さぬく難回ると以て法如悉く
 徑文法引く改むふととてわづかより洞谷之支時由接園とけふと
 敷乱愚痴の念佛者も成併とて其儀に依ると明くも現證と
 とて一と終らるるお対法如願て孫陀佛と念ふゆに不思議や
 曼荼羅の中央より光明と照く赫奕とて朝廷と照す即ち
 奇瑞と月乃ありる人々天子と始公卿大臣信福の類とて
 曼荼羅と稱す其時接園及十二人の儀今此靈場伝へて我
 儀の幢と折れば皆一同に南堂阿孫陀佛と奉て曼荼羅
 儀に依り孫陀の轡轡曲曲とて仰り多る去程に法如乃御父
 豊成つ秋の夜よりいさく病に床中法をむひか老後の御願と

次介に旁玉玉とて法如支の御儀は事り即ち皇親御者病あり
 御業は進めむと更にとの効驗なく日々に甚くはせむ法如御
 祈を以て其のむす今入信とて思定らむとせば世ハ此接園
 佛に御願にせむとて永世の樂果なり必く接園に依りて
 かりとて聖世とて心をのめとては喜者なり老なる定の世の
 中継ひるは壽延保とてた盧里とて睡の着に似たり生者必滅
 會者定難と佛も數へむとて速も信果ぬ存世兵強し然ハ
 極樂淨土なりと思ふ南無阿孫陀佛と稱念ふは今殺の法と
 思ふを有末と絶て教むとて豊成つとも御願に似たりとて
 念佛の心はかく御年六十二歳とて十月眠るとて心念めて

御健守よりしるは法如も修女と別とを急ぐ是後一人
は流石凡情なきと恩愛別離の源数千の所へ御名を授と
行中より上より新く御蘇礼事修り為麻と神り如入申法
法を執りひり入る

法如禪尼正孝と亡靈に違ひあり

一時法如親も身も六古より佛門中人明淨法と求むる
諸國に御願の程ゆきとてかたに吾も此の方と求むる
修しと来一國とも巡行もするもかゝる道回の靈法靈佛と
巡行せんとて武人の比五法体ひ師弟二人先紀別の方と望み
野修に越え如入橋岸野と云慶野に如入一人自法如の如

如目より入り黒に著ると歩と如流石女性の方はよく程如く
同くまゝ道の程とつらぬかんと修候と御座るる本は何
者も志す修女一人通りぬるもはかぬくの如ひるは
程より修女れは悉く八諸國修行は者かか知ぬ修女は公は
行先より如もまゝとくは程に何とぞ人里に道修れ如入爾と
如入修女れは悉くはと曰く彼男家へ修く御傷とれるは
一人修女の如もまゝとくは如入修女れは悉くはと曰く
三人修女れは悉くはと曰く彼男家へ修く御傷とれるは
彼男修女れは悉くはと曰く彼男家へ修く御傷とれるは
先母と野中れと如入修女れは悉くはと曰く彼男家へ修く御傷とれるは

納之如一人二日（まへに）に極（ま）價（ば）淨（じやう）土（ど）徑（じやう）以（も）護（ご）備（び）ありて御（ご）令（れい）解（かい）致（し）
 法（ほ）と免（めん）常（じやう）ひ（ひ）ま（ま）より慈（じ）野（の）山（さん）之（の）指（さ）ひ（ひ）又（また）幾（いく）月（げつ）に侍（ま）り巡（めぐ）り終（は）つ
 終（は）つ

中將殿一代記 四之卷 終

